

外国人の見た日本

—クール・ジャパンとその源流を求めて—

石井 昭夫

『ホスピタリティ・マネジメント』Vol. 8 No. 1 (2017年3月) 抜刷
亞細亞大学経営学部

クール・ジャパン編

外国人の見た日本 —クール・ジャパンとその源流を求めて—

Japanese Way of Life Observed by Western People:
Historical Study of the Current "COOL JAPAN" in Trace for its Source

石井 昭夫*
ISHII, Akio

近年、身边に外国人の姿を見ることが珍しいことではなくなった。2016年の年間の訪日外客は2000万人の大台を突破することが確実視されているし、2016年6月現在の在留外国人数も史上最高を更新して230万人の大台を超えたと報じられた。

国際観光サービスセンターの『月刊国際観光情報』の「ニッポン案内コーナー」は毎月案内所に寄せられる質問等を紹介しているが、行ってみたいという訪問先は、全国津々浦々に及び、日本人でさえ知る人の少ない思いもかけないものへの関心が示されている。情報テクノロジーの発展はインバウンド観光の姿を大きく変え始めている。

幸いわれわれの知る限り、訪日外客は全体的によい印象を持ち帰ってくれているようだし、在住外国人の好感度も高いようだ。この機会に「外国人の見た日本」をテーマとして、目下評判のTV番組「クール・ジャパン：かっこいいニッポン再発見」などに見られる現状から、ここに至るまでの過去の流れを源流まで遡ってみよう。

1. 現代のクール・ジャパン

ここがヘンだよ日本人

外国人が見た日本を初めて正面からとりあげた
*観光研究者、元立教大学・帝京大学観光学科教授

TV番組はTBSの「ここがヘンだよ、日本人」(1998~2002年)であった。番組の生みの親で司会役を務めたピートたけしは、新宿の飲み屋でアメリカ人の真似をする日本人歌手をおかしいというアメリカ人に、「白人が歌舞伎役者の真似をしたら笑うだろう」と言われた。「自分が生まれ育った場所で、見慣れたもの、あたりまえだと思っていることでも、外から入ってきた人のフィルターを通して違ったことが見えるな、面白いな」と考えたことが番組誕生のきっかけだったという。

当初のコンセプトでは、日本に長く滞在して日本語を話せる外国人を集め、日ごろ感じている日本や日本社会に対する疑問・批判・怒りなどを思いきりぶつけさせ、日本人論客パネラーを交えて白熱したトークバトルを展開するというのが狙いであった。議論の素材として、いくつかの国をとりあげて国情の違いを比較する「世界人間ウォッチング」とか、テーマを選んで国民の反応の違いを見せる「世界を比べてみよう」などのVTRやテロップが多用され、大変面白い番組であった。

この番組については、慶應義塾大学『メディア・コミュニケーション〔研究所紀要〕』No.53が、「テレビ視聴が人々の現実認識に及ぼす影響」という文脈の中で特集している。萩原滋の冒頭論文『「ここがヘンだよ日本人」：分析枠組みと番組

の伝統や国民性に直接結びついたものではなく、流行が収まると自然呼び名も消えてしまった。

これに対し、番組「クール・ジャパン」は具体的な流行を追うのではなく、最初から日本人の国民性と結び付けられていた。日本に住む外国人たちが、日本ならではの体験、日本にしかないモノやコト、日本人の生活様式や思考などのうち、彼らが面白いと思う事柄を外国人自身の言葉で紹介していく。司会進行役の鴻上は、番組の当初外国人参加者たちに「日本でこれはクール（かっこいい・優れている・素敵）と思ったことは何？」と訊ねたところ、「洗浄機付き便座、ママチャリ、アイスコーヒー」と答えられ、「なんでアイスコーヒーがクールなの？」って素朴に訊いたら、イタリア人が私の国にはなくて日本に来て初めて飲んで感動したから」と答えた。他のヨーロッパ人もロシア人もブラジル人も同意したのでびっくりし、目からウロコが落ちたという。コーヒーは外国から来たものだが、アイスコーヒーは日本人が作ったものだというわけである。クール・ジャパンの代表格のキティーちゃんも外国人なのか日本人なのか不明だし、外国に受けているアニメのテーマや内容はインターナショナルなものも多い。こういうものが誕生してくる日本という国、日本人の国民性がクールとみられているわけだ。

外国人がクールだというのは、自国になくて日本に来て初めて発見し、体験して、それが気に入ればクールであり、ヘンだと思えばクールでない。堤や鴻上の著書で「ノットクール」とされた例に、男が人前で泣く、音を立てて麺をする、初対面でも年齢を訊く、女の子が父親と風呂に入る、などいろいろ挙がっている。ノットクールと判定される日本人の習性や価値観も大変多いのは、「ここがヘンだよ日本人」の毎回のタイトルを見てみれば十分であろう。個別のモノやコトは、クールだったりノットクールだったりするが、番組に登場した外国人たちの全体的な日本像が「おいしい

食べ物がふんだんにあり、安全で安心して暮らせる日本は世界一暮らしやすい国」であることは、日本人として喜ばしいことであり、誇るに足ることである。

現代日本は政治・経済・産業・技術などの面で、欧米を超えるほどの近代化を推し進めてきたが、その一方で、音楽、絵画、演劇など諸々の文化的分野では独自の伝統を持ち、さらに和服と洋服、和食と洋食、和室と洋室、和菓子と洋菓子、和紙と洋紙等々、衣食住全般にわたって両者を併存させてきている。日本人は近代化の過程で、良きにつけ悪しきにつけ、意識的かつ無意識的に両者を使い分け、「和魂洋才」を適当に織り込んできた。そうして引継いできたものが国民性というべきものであろうし、表面が激しく変化する中で、社会もまた遺伝子を持ち、それと意識されずに後代へと遺伝していくのであろう。

2. 幕末・明治のクール・ジャパン

現代日本の文化や日常生活のあれこれがクールと見られるとすれば、遠い過去に日本を訪れ、あるいは居住した外国人が書き残した文献に、現代のクール・ジャパンに通底する遺伝的要素を見出しができるだろうか。

最初に、近代以前の伝統的な生活文化がそつくり残っていた幕末開国期から、近代化を急ぎ富国強兵実現のために容赦なく古いものを壊し、脱ぎ捨てていった激動の明治時代を外国人はどう見たのか。これを探索するガイド役として、外国人の見た日本を俯瞰する筑摩書房の『外国人の見た日本』(全5巻)、富田仁編『事典 外国人の見た日本』、竹内誠監修『外国人が見た近世日本』などがある。これらはいずれも、日本および日本人について外国人が書いた書物等を時代別、項目別に整理して考察したものである。これらの背景に無

数ともいえる訪日・在日した外国人の日本に関する著作や報告が存在することはもちろんである。本項では、とくに幕末・明治期の外国人の見た日本に焦点を当てた渡辺京二『逝きし世の面影』に沿って概要をみてみよう。

外交官たちの第一印象

現代のクール・ジャパンが外国の一般市民の日本觀であったのに対し、この時期に日本を訪れた西洋人たちは、ほとんどが知的エリートと呼ぶにふさわしい人たちであった。彼らは自分たちとは異質の文明国日本を見出して驚くとともに、西歐化(近代化)に向かって走り出した日本が独自の文明を喪失していくことを憂える人が多かった。日本に最初に外国人として居住したタウンゼント・ハリスは、下田玉泉寺に初めてアメリカ領事館旗を掲げた日(1856年9月4日)に、早くも「厳粛な反省——変化の前兆——疑いもなく新しい時代が始まる。敢えて問う。日本の真の幸福となるだろうか」と書いた(ハリス『日本滞在記』)。ハリスの通訳官ヒュースケンは、日本滞在1年2か月を経た頃の日記に、「いまや私がいとしさを覚えはじめている國よ。この進歩はほんとうにお前のための文明なのか。この國の人々の質朴な習俗とともに、その飾り気のなさを私は賛美する。この國土の豊かさを見、いたるところに満ちている子供たちの嬉しい笑い声を聞き、そしてどこにも悲惨なものを見出しができなかつた私は、おお神よ、この幸福な情景がいまや終わりを迎えようとしており、西洋の人々が彼らの重大な悪徳を持ち込もうとしているように思われてならない」(ヒュースケン『日本日記』)と書いている。

1858年に日英修好通商条約締結交渉のために来日したエルギン卿の隨行者ローレンス・オリファントは、もっと手放しで日本を褒め称えた。「われわれの最初の日本の印象を伝えようとするには、

読者の心に極彩色の絵を示さなければ無理だと思われる。シナとの対照がきわめて著しく、文明が最高度にある証拠が実に予想外だったし、われわれの訪問の状況がまったく新奇と興味に満ちていたので、彼らのひきおこした興奮と感激との前にわれわれはただ茫然としていた。この愉快きわまる國の思い出を疊らせるいやな連想はまったくない。来る日来る日、われわれがその中にいる國の友好的で寛容な性格の鮮やかな証拠を与えてくれた。一日のあらゆる瞬間が何かしら注目に値する新しい事実をもたらした」と書き、日本人の衣服や装飾の趣味の優雅さ、幕府役人の洗練された紳士ぶり、気違いのようになって買い物らざにはいられない美しい品々、鍵も錠もない部屋に物をおいて一度も盗まれたことがないこと、女を口汚く罵る声を聞いたことがないのは不思議、子供が虐待されているのを見たことがない、などなどの観察を述べている(オリファント『エルギン卿遣日使節記』)。

その後人々と日本にやってきた諸国の外交官、ジャーナリスト、学者・文化人、お雇い外国人たちのほとんどが、国家としての日本の歴史や現状を記述するだけでなく、美術工芸はもちろん、庶民の表情や暮らしぶりなどの日常生活についても、興味と愛情をこめて細かく語っている。ヒュースケンやオリファントの古き良き日本への賛美は、明治時代になると、ピエール・ロティ、ラフカディオ・ハーン、ヴェンセスラウ・デ・モラエス、エドワード・モースらに引き継がれていった。

逝きし世の面影

渡辺京二『逝きし世の面影』は、幕末・明治期に外国人が書き残した日本での見聞記を広範囲に涉獵し、鎖国時代に培われた独自の社会と文化が崩壊してしまったこと、そしてその失われた文明の面影を、外国人の証言によって再現しようとした。現代の日本人にはわからなくなってしまった

古い日本文明の在りし日の姿を偲ぶには、異邦人の証言に頼るしかない。「なぜなら、私たちの祖先があまりにも当然のこととして記述しなかったこと、いや、記述以前に自覚すらしなかった自国の文明の特質が、文化人類学の定石通り、異邦人によって記述されている」からであった。

明治初期に来日した欧米人にとって、日本は「妖精の住む小さい不思議の国」であった。しかし、欧米を模倣して富国強兵を急ぐ新時代の日本人にとって、こうした賛辞は心外であり、時に激しく反発した。貧しく遅れている日本に対する西洋人のこのような誤った賛辞は、反動的な役割を果たしかねないと考えていたからである。後述の『日本事物誌』の著者バージル・ホール・チェンバレン（1850～1935）は「新しい教育を受けた日本人のいるところで、諸君に心から感嘆の念を起こさせるような、古い奇妙な、美しい日本の事物について、詳しく説いてはいけない」と書き、その例として、英國の詩人エド温・アーノルド（1832～1904）の、1889年（明治22年）に来日した時の歓迎晩餐会でのスピーチが、日本の主要新聞でこっぴどく叩かれた話を紹介している。アーノルドは日本を「地上で天国あるいは極楽にもっとも近づいている国」と称賛し、「その景色は妖精のように優美で、その美術は絶妙であり、その神のようにやさしい性質はさらに美しく、その魅力的な態度、その礼儀正しさは、謙虚ではあるが卑屈に墮することなく、精巧であるが飾ることもない。これこそ日本を、人生を生甲斐あらしめるほとんどあらゆることにおいて、あらゆる他国より一段と高い地位に置くものである」と述べたのだが、翌朝の各紙の論説は、アーノルドが産業、政治、軍備における進歩にいささかも触れず、もっぱら美術、風景、人々のやさしさと礼儀正しさなどを褒めあげたのは、日本に対する一種の軽視であり、侮蔑であると憤慨したのであった。実際のところ、国際世論は、日本の前例のない近

代化のスピードを大いに賞賛する一方で、明治も後半になると、新しい日本を傲慢、脅威とも捉えるまでになっていたのである。

渡辺は、『逝きし世の面影』の第1章「ある文明の幻影」において、文明について次のように提示した。「歴史的個性としての生活総体のありようであり、ある特定のコスモロジーと価値観によって支えられ、独自の社会構造と習慣と生活様式を具現化し、それらのありかたが自然や生き物との関係にも及ぶような、そして食器から装身具・玩具有いたる特有の器具類に反映されるような、そういう生活の総体を文明と呼ぶのであれば、18世紀初頭から19世紀にかけて存続したわれわれの祖先の生活は、確かに文明の名に値した」と書き、その文明は明治末期に滅んだことを承認した。しかし、滅んだのは19世紀に存続した日本の生活様式であって、民族特性は滅びず、変容するだけだと説き、あとにつづく第2章から第14章まで、この時代の外国人たちの見た日本を、多様な引用によって「逝きし世の面影」として書きつづった。それらは「陽気な人々」であり、「簡素と豊かさ」、「親和と礼節」、「子供の樂園」などなどであり、とりあげられた外国人の多様な見聞・体験はクールあるいはノットクールとみられたコトやモノに満ちている。

外国人が書いた『日本事物誌』 B.H. チェンバレン『日本事物誌』*Things Japanese* は、日本の事物のうち外国人に興味があると思われるものを選び、アルファベット順に項目を並べ、事典風に日本を紹介した「日本小百科」の趣のものである。チェンバレンは1873年（明治6年）23歳で来日し、1874年から82年まで海軍兵学校で英語を教えながら日本文化と日本語の研究に励み、1886年から東京帝国大学の教授を務めた。1911年に離日するまで38年間を日本で過ごしたが、この間1880年に『日本事物誌』の初版を出版し、その後項目の削

除と追加による改訂を度々行い、第5版が日露戦争中の1905年に出版された。第5版の序文で、チェンバレンは、古い日本の文明が滅んだことを確認した上で、同書を古い日本文明の葬送の書として、墓碑銘として書いたと記している。

最終版（第6版）が出たのは彼が帰国し、1935年に亡くなった後、軍国主義がはびこる日中戦争中の1939年（昭和14年）であった。チェンバレンは軍国主義と愛国主義を嫌っていたから、『日本事物誌』は太平洋戦争終了後まで訳出不可の禁書であった。1969年に翻訳刊行された第6版『日本事物誌』（全2巻・東洋文庫）では、24分野の201項目にわたって当時の日本を紹介している。チェンバレンは日本の西欧化を否定したわけではなく、「欧化」という項目では、「日本の西欧化を皮相なものだ」という人がいるが、この評価は当たらない。第一に、日本人の性格は芯が強く、第二に、日本人は明治の変革によって突然欧化の光をあてられても目がくらまないだけの知的訓練を、それ以前にすでに行っていた」と書いている（高梨健吉の解説より）。同書は、古い殻を脱皮して行く日本を見つめた最高の日本通による「クールとノットクール」の集大成のような書であった。

3. 南蛮人の見たクール・ジャパン

「外国人が見た日本」の真の源流は、最初に日本にやってきたカトリック教の宣教師たちの著作である。それ以前の日本の歴史を通じ、外国人による日本人の生活や文化に関する発信は存在しない。そもそも自国と他国の文化や習慣の相違が意識されるのは比較する対照が明確であり、比較の意味が生まれてからのことである。

ヨーロッパ諸国はキリスト教文化を共有しており、諸国間の相違は異質の文明とは認識されなかつた。ポルトガル、スペインのイベリア半島勢が

ヨーロッパによる「地理上の発見」時代を先導してアフリカ、アジアやアメリカの文化と接触したことによって、人類は初めてグローバルな視点で世界を見比べることができたのである。

幕末・明治期に来日した西洋人たちは多彩な見聞記を残したが、かれらの多くは鎖国時代のケンペル、ツンベルク、ドゥーフ、シーボルトら長崎のオランダ商館員の著作だけでなく、ザビエルやフロイス、ヴァリニャーら16～17世紀に来日した宣教師らの著作をも読んで、予備知識を得ていたことが彼らの著作から窺える。ここでは鎖国時代は省略し、源流に行ってみよう。

異文化先進国日本の発見

16世紀の半ばになって、ヨーロッパ人の歴史觀が宗教から離れて世俗化し、世界史を教会に抑制されずに考察する風潮が高まりつつあったときに、突如として異様に高度な「日本」という文化圏がヨーロッパ人の前に出現した。

ポルトガル人をその宗教とともに受け入れたのは、中国より日本の方が半世紀早く、西欧人は大陸極東の行き着いた果てに、異質の先進国を発見して大いに驚いた。イエズス会の宣教師や修道士らは日本語を学び、日本を觀察し、著作や書簡や正式の年次報告等において彼らが觀察した記録をたくさん残してくれた。伝えられた日本像のうち「クール」とみられたなものを拾ってみよう。

ザビエルの見た日本 イエズス会によって派遣されたフランシスコ・ザビエルは、インドや東南アジア原住民に対するそれまでの布教活動の経験を踏まえたうえで、とくに日本への布教が実り多いものと確信した。日本の国情や国民性をアンジローという日本人青年や当時日本との交易に従事していたアルヴァレスを通じて知り、日本が高度な文明国であること、ポルトガルの政治的・軍事的支配を受けておらず、植民地として毒されていない

いこと、また、イスラム勢力が及んでいないことも、布教にプラスであることを確信させた。事実、鹿児島到着直後の手紙で、ザビエルは日本人について「この国民は、これまでに私が会った国民の中でもっとも傑出している。日本人は相対的に良い素質を備え、悪意がなく、交わってすこぶる感じが良い」と述べている。

ザビエルのこうした考えはイエズス会の布教方針に生かされた。全世界へのカトリック布教を使命としたイエズス会は、非キリスト教諸民族を文化の水準によって3つのカテゴリーに分け、日本は中国などと並んで最上位に属する国とされた。ザビエルに後を託された2代目のトーレスもザビエルの方針に従い、日本での布教の方策を次のように定めている。日本および日本人に適応したり方をとること、すなわち「異教文化であっても評価すべきは評価し、宗旨の根幹に触れるものでない限り、極力現地の文物に適応して無用の摩擦を避けること」を基本方針とした。その上でザビエルは、日本人の知的好奇心の強さに対応できる知性豊かな宣教師の派遣をとくに要請したのであった。

全体的評価 ザビエルやトーレスら初期の宣教師たちは、地球の果てに日本というヨーロッパ人は全く異質の文化圏があり、その文化が自分たちと同じように高度であることを見出して、感動し、あるいは狼狽したにちがいない。来日まもなく京都担当に任じられた宣教師オルガンチーノは、京都や上方の日本人と交際を重ねるうちに、いよいよ日本人に魅せられ、海外への通信のなかで次のように書いた。「われら（ヨーロッパ人）は賢明に見えるが、彼ら（日本人）と比較すると、はなはだ野蛮であると思う。私は眞実、毎日日本人から教えられるることを白状する。私には世界中でこれほど天賦の才能をもつ国民はないと思われる」と書き、また「都こそは日本におけるローマに当

たり、科学、見識、文明はさらに高尚である。信仰のことはともかく、われら（ヨーロッパ人）は彼ら（日本人）より顕著に劣っている」とまで言っている（松田毅一・E.ヨリッセン『フロイスの日本覚書』より）。また、宣教師ではなく、17世紀はじめに初来日したスペインのフィリピン臨時総督だったドン・ロドリゴ・デ・ヴィヴェロも「日本の政治は、私が知る限り、世界で最も優れており、彼らが神を知らないにもかかわらず、まことに完全に数多くの法律を有することは…心に嬉しい」と書いていている。

この時代、ヨーロッパは中世のカトリック支配による精神の束縛や生活文化の貧弱さから開放されたばかりで、日本や中国に出会って眼のあたりにしたのは、人々の豊かな暮らし、芸術の香りに満ちた文化であった。中国の絹、陶磁器、茶、日本の金銀、茶の湯文化、漆器、インドの染付されたサラサなどは、これらに接したヨーロッパ人にとって大きな驚きであり、カルチャーショックであった。日本側はそれまでの本朝（日本）・唐・天竺の3国世界観をあっけなく放棄させられたが、ヨーロッパ人もまた、日本人と出会うことによって、それまでアフリカ、アジア、アメリカを体験してきても変えることのなかった人種観や世界観を変えざるを得なかつたのである。

この時代に日本にやってきた南蛮人によって日本と日本人に関するおびただしい記録が作られ、今に残されている。日本人の中に南蛮人を尊敬する者も嫌惡する者もあったように、日本人に対する彼らの好惡もまたははだしかつた。ザビエルやオルガンチーノのように絶大な好意を抱いてくれた人がいる一方、嫌惡し侮蔑する宣教師も少なくなかった。巡察師として来日したヴァリニヤーノは、日本を文明国と認め、少年使節団をヨーロッパに送って学ばせたほど日本に好意的であったが、晩年は幕府のキリスト教拒否にあって、最後には不可解な日本に愛想をつかず発言もしている。

A.M. ジャネイラ『南蛮文化渡来記：日本に与えたポルトガルの衝撃』は、そうした数ある日本紹介の中で、『日本史』のフロイス、『日本巡察記』を残したヴァリニヤーノと『日本教会史』を書いたジュアン・ロドリゲスの3人は、日本語によく通じ、日本紹介の大作を残した点で躍んでていると評している。

フロイスの「日欧文化比較」 ルイス・フロイスは冷静な観察者であった。フロイスは大著『日本史』や『日本年報』とは別に、日本とヨーロッパの風習を対比した「日欧文化比較」ともいうべき小冊子を残している。1585年6月14日に加津佐で書かれたと記されており、フロイスがこれをまとめた意図は「（ヨーロッパと日本）人々のあいだにこれほど極端な対照が存在しうるとは、ほとんど信じる気持ちになれないほどである。ここで私は、彼我の間のもうろろの事柄が混乱を見ぬよう、それらを数章に分けて列挙するものである」と書かれているだけで、誰のため、何のために書かれたものかは不明である。しかし、イエズス会の布教方針が「郷に入れば郷に従え」であり、両者の差異の大きさは、その実践が極めて辛く厳しいものであったことを窺わせる。

同書は、日本とポルトガル人ないし西欧人との違いを14章に分け、合計611項目にわたって書き記したものである。内容は、男女の風采と衣服、児童・育児、食事と飲酒、武器、馬、病気・医者・薬、家屋・建築・庭園、船と道具、演劇・舞踏・歌謡・楽器等々であり、細かい観察によって16世紀末頃の西洋と日本の生活習慣の違いが対照されている。日本語訳としては2種を参照した。松田毅一・ヨリッセン『フロイスの日本覚書』（中公新書）はこの書が書かれた背景と書かれている内容の信ぴょう性、個別項目ではなく総括的に当時の日本とヨーロッパの風習の相違を解説しているのに対し、岡田章雄訳注『ヨーロッパ文化

と日本文化』（岩波文庫）はフロイスの書いた1条1条について、解説と考察を加えている。フロイスはとりあげている個々の項目について、「クール」とも「ノットクール」とも評価はしておらず、このように異なっていると紹介するにとどめている。

南蛮人が高く評価した事柄

西欧人にとって異質で耐え難い日本の風習が多かったのだが、宣教師たちは日本人を導くことを使命としたがゆえに、広く深く日本人と接し、日常までも共にしてきたから、欠点ばかりではなく、彼らが高くあるいは好意的に評価したものもたくさんあった。そこで、フロイスの同書や同書以外の日本文化評、岡田章雄『キリシタンの世纪』、ジャネイラ『南蛮文化渡来記』などの文献から、日本を高く評価してくれた事柄を概観してみよう。

清潔と秩序正しさ 宣教師たちが日本の生活に入り込んでみて、もっとも心を打たれたのは、清潔さと秩序正しさであった。大名や豪商の居館・住宅を訪れた宣教師たちは、その建築・調度の美しさ、行き届いた清掃、生活様式の中の優れた秩序に大いに感心した。彼らが悪魔の殿堂とみなした寺社、悪魔への奉仕者と非難した僧侶たちの生活に対してさえ、宗教的感情を超えて感服しないわけにはいかなかった。日本人が入浴を好み、浴室や公衆浴場の設備が行き届いていること、履物を脱いで家中に入り、箸でものを食べ、もっとも不潔になりがちな便所や廐舎が極めて清潔に保たれていることなど、衣食住すべての面にわたって日本人が極度に清潔を重んずることは、到底ヨーロッパ人の及ぶところではないと彼らは考えていた。宣教師たちは、日本の上層社会と接触することでそのことに気付き、自ら身辺を清潔に保ち、侮りを受けないように心掛けていたといふ。

児童と育児 宣教師たちは日本人が礼儀正しく、思慮深く、自制心に富み、きわめて忍耐強いことをヨーロッパ人に勝る長所として挙げ、こうした特性が幼少時から培われていることに注目した。上記フロイスの「日欧文化比較」の児童・育児の項目を見ると、「日本では、生まれた子供に産着を着せるが、その場合、両手はいつも自由になつていて。ヨーロッパでは長いあいだむつきで手を包んでおくので、手は拘束されている。日本には揺籃もなく歩行を習わせるための車もなく、ただ自然に育てている」と記述している。ヨーロッパでは4歳の子供でもひとりで食事ができないのに、日本の子供たちは早くから箸を使うことを覚え、3歳になればひとりで食事をする。また、ヨーロッパでは鞭を用いて子供に懲罰を加えるが、日本では言葉で戒め、6~7歳の子供に対しても、60~70歳の人に対するかのように、眞面目に話して譴責する。日本の子供たちは、ヨーロッパのように美衣・美食によって育てられることがなく、ほとんどを半裸で、寵愛も受けず、快樂も与えられずに養育される。しかし、子供でもその行状に分別と優雅を完全に備えている点はヨーロッパをはるかに凌ぎ、10歳ですでに使者としての役目を果たす判断と思慮を身につけている…」などと続いている。

フロイスはかくのごとく日本人の育児法が、ヨーロッパの育児法に比べて、子供の成長のうえではるかに効果的であると賞賛しているのである。

茶の湯 日本文化の中で宣教師らがもっとも感嘆し、重要視したのは茶の湯の儀礼であった。当時堺で生まれた新しい数寄の儀礼が全国的に流行した時代で、茶の湯は自然との調和の中に、簡素と清潔と秩序とを追及した日本文化の粹ともいべきものであった。ジョアン・ロドリゲスは大著『日本教会史』の中で、来客を迎える日本の儀礼について非常に多くのページを割いており、中で

も第32章から35章までの4章にわたって茶の湯の儀礼についてとりあげている。茶の湯の形式の紹介にとどまらず、岡田章雄の言葉を借りれば、「科学的にまた哲学的に、茶樹の植物学的研究から茶の医学的効能までを論じ、さらに深く茶の湯の精神を追究し、その中に日本の文化を究めようとした本格的な論文」である。岡田はそれを証するため、ロドリゲスの以下の言葉を引用している。

「茶の湯の道は、外面的行動における礼法・作法・謙讓・自制を守り、また傲慢や不遜さを示さず、外面に謙虚さをあらわして、身心の安らぎと静けさを保つことを信条とする。また、榮耀榮華と外面的華麗と公的生活の豪華さを避けて、むしろ僻地の隠者に適したよう、表裏のない簡素を本分とし、礼儀正しく清潔な衣類をつけ、その職に相応しい家とその職務に関するすべてにわたって、一定の規律と清淨さと淡白さを旨とする。なぜなら、すべての人がこの芸道を本業とする人に注目していて、彼らは、民衆のあいだで立派な習慣を身につけた人としての声望を得ており、そのようなものとして尊ばれ、敬われているからである。」

茶の湯は宣教師にとって、日本人と交わるために外交的儀礼として重要であつただけでなく、それを通じて日本の精神に触れ、日本の文化を理解し、布教のために役立てることができたのであった。それゆえ、ヴァリニヤーノは住院を建設する際の重要な事項として、すべての住院に清潔で整備された茶室を設け、茶の湯について心得のある同宿（宣教師を手伝う日本人信徒）なり誰かを常駐させ、訪問者の身分に相応しい接待を行なえるよう準備しておかなければならぬと定めた。そのためには必要なお茶の準備や道具の備えについてもこまかく指示しており、宣教師自身も必ず茶の湯の

作法を身につけることを命じていた。

建築と庭園と日本美 フロイスもヴァリニヤーノもロドリゲスも、日本のお城、大名・武士の屋敷、神社仏閣から庶民の家までよく見ていて、それぞれの書いた日本の歴史にこまごまと書き込んでいる。フロイスは、ヨーロッパの建築と日本のそれを比べて、一般論として威厳や頑強さにおいてヨーロッパが勝るとしているが、日本建築に見られる秩序と清潔さ、技巧について絶賛している。とくにその立役者である大工の技術に感嘆して次のように書いている。「日本の大工は仕事が極めて巧妙で、広壯な邸宅を造る場合、必要に応じてばらばらに解体し、ある場所から他の場所に運搬することができる。そのためには、まず材木を全部細工し、その後3~4日でそれを組み合わせて立てるので、1年かかっても建ちそうもない家を何もなかったところに突如として建ててしまう」とプレハブ建築ともいいくべき方法を開発していることに驚き、さらに「われわれのものとはほとんどあらゆる点で異なるすがすがしい壮大な庭園について、日本の美しい絵画について、美麗・豪壮な建築について、《部屋の豪奢、細工の繊細、精緻、風変わりな木材、技巧など》の凄さ」を驚異の念を込めて語っている。

ロドリゲスも日本建築を称え、家屋の構造、装飾、広間の仕切り、様々な部屋の働きを細かく描写し、「木、川、泉、動物、鳥、湖、海、舟、人の姿や昔物語」を描いた内壁の絵についても細かく述べる。「広間の部屋ごとに図柄を異にする絵が描かれ、貴人の屋敷では装飾板や部屋の戸が金箔塗りの地になっていて、この金地のうえにそれぞれにふさわしい色とりどりの絵が描かれる。…装飾用として壁に沿って、あるいは壁のかわりに屏風を立てて広間を飾りつける。その屏風はどれも、金地にだれか有名な絵師が描いた飾り板6~8枚よりなっている」と感嘆の思いを語っている。

日本画と日本刀、その他の日本美 日本の優れた美術・技芸として当時ヨーロッパに紹介されて世界の注目を惹いたものに、日本画・屏風・刀剣・漆器・和紙などがある。日本画の技法について、ロドリゲスは「彼らは自然の事物を描くのに、できるだけ優れた類似性をもって自然を模写することにおいてきわめて優秀である」といい、また、色絵・墨絵・泥の絵画を挙げ、とくに墨絵について「墨の絵具またはそれを水に混ぜたものを使うが、この絵はきわめて巧妙であり、優秀である。これが日本人生來の気質に合致しているために、これを大いに楽しむ」と書き、彼らはすばらしい技巧をもっているので、それは生き生きとしており、同じ墨色で、鳥類や樹木、その他の物の色そのものさえ表わしているかと思われるほどである、と賞賛している。当時来日したヨーロッパ人は、至る所で豪華な障壁画や襖絵・屏風絵を鑑賞することができた。室内調度品としても便利な屏風は盛んにヨーロッパに輸出され、ヨーロッパ人にとって新奇な日本画が注目を浴びたのであった。

ロドリゲスは、日本の技術者の中でもっともすぐれているのは木造建築部門の者で、それに次ぐのが刀鍛冶であると言っている。刀剣も日本の優れた技術を代表するものとしてこの頃に初めてヨーロッパに紹介された。完璧な切れ方のみならず、細工の彫金も高く評価され、ロドリゲスは「細工の優秀さと多彩さにおいても、金銀と銅とを混合させることについても、シナ人やその他の東方諸民族を凌駕している。この合金によって黒い銅（赤銅）を作り、それで刀の鞘につける鍔を作っている」と技術の優秀さを讃えている。

漆器と和紙 ロドリゲスは「漆器は中国や交趾、シャム、カンボジヤでも行われているが、日本人がもっともこの技術に卓越し、きわめて器用で、いろいろな漆器を作る。まるで光り輝く滑らかな皮で出来ているかのように見え、固い金粉でさま

ざまなものを描く。金と銀の薄片でできる花とか、比類のないほど贅沢に細工された真珠貝とかをそれにはめ込む仕事を専門にする職人がいる」と書く。また、フロイスは、秀吉がインド副王に送った書簡を収めた漆塗りの箱について細かく説明したうえで、「このような立派な工芸品がどのようにして作られるのかわからぬだろう。優雅で豪華で雅致があり、それに箱を閉じる紐がついている。もし、ヨーロッパの櫃のようなものが作られれば、ヨーロッパの王侯は誰でも珍重するだろう」と褒めている。

このように日本の漆器はヨーロッパ人に珍重され、愛好されて、さかんに輸出されたばかりでなく、好みに応じた櫃や箪笥・双六盤などを注文によって輸出用に製作することさえあった。また、教会でも、聖餅箱や書見台、机などに、漆器の品を特別注文で作らせることもあったという。

和紙については、フロイスの「日欧文化比較」が「ヨーロッパでは、紙はすべて古い布の屑から作られるが、日本の紙はすべて樹皮から作られ、われわれの紙はわずか4～5種類しかないが、日本の紙は50種類以上ある」と書いている。日本の紙は楮・三桠・麻など、原料により生産地によって多くの種類があり、ヨーロッパの紙よりもはるかに上質で、用途もきわめて広かった。和紙は書簡や記録用、印刷用などに宣教師らも盛んに使ったので、その優秀性は実物を通じてヨーロッパに認められたのであった。

源流は細々とした流れではなく、大きな池であった。そこから日本に好意的な記述を掬い上げてみたのだが、その内容は現代日本に置き換えてみてもそれほど違和感を覚えるものではない。南蛮人時代のクール・ジャパンは、鎖国時代を通じてさらに発展・深化し、開国後は近代化に邁進して和洋混交の生活様式を築いてきた。第二次世界大戦敗戦から70年を経て、現代日本は、受け継いできた伝統文化に加え、欧米先進国由来のテクノロ

ジーの分野でもポップカルチャーの分野でも独自性を發揮し、オンラインといえる特色ある現代文明を築いている。

4. インバウンド観光とクール・ジャパン：むすびにかえて

番組「クール・ジャパン」で発信しているのは、プログラムの進行上、日本語または英語が話せる在住外国人に限定されているが、仮に日本国内を旅行中の訪日外客を選抜できるなら、知識と見聞に量的な差はあっても、今日ならおそらく同質の反応が得られるであろう。一昔前まで、外国人観光客が日本人の日常生活圏の中に入り込むことはなく、長らくインバウンド観光と国内観光は混じり合わない二重構造になっていた。ところが、最近ではIT技術の大いなる発展によって、情報の壁を超え、言語の壁すらも超えて、彼らは国内を自由に旅行するようになってきた。端末を持ち歩けばオンザスポットで日本人と大差ない情報が得られるようになり、宿泊場所も観光対象も区別が薄れてきている。

さらに、先端的ITによって「ホーム」における情報の充実だけでなく、「アウェー」においても日本観光情報が瞬時に入手できるようになり、外と内との情報ギャップも埋められてきた。日本の観光宣伝にとって、アウェーでの情報不足と来日後のホームでの充分な情報提供が大きな課題であったのだが、状況は大きく変わった。今後のインバウンド観光振興はこれらを踏まえて、より戦略的な対応が必要になるだろう。

2010年、経済産業省内に「クール・ジャパン室」が設置された。目的は「日本のクリエイティブ産業に関するビジネスプロジェクトの海外展開を、政府が資金的支援を中心とした政策的支援を行うことを通じて後押しする」こととされる（三原龍太郎『クール・ジャパンはなぜ嫌われるの

か』）。番組「クール・ジャパン」の趣旨とは違って、こちらは輸出政策である。こちらのほうが本家の「クール・ブリタニア」に近いのであろうが、同じ用語を使っているために、官主導のマンガ・アニメなどの売り込み作戦とみられ、番組の方にも反発するメールが来るようになったと鴻上尚史が書いている。官が何を採用するかまで選別するようなことがあってはならないが、人気の高いコンテンツ、ファッション、デザイン、観光サービスなどの商材の海外発信を強化すべきことは当然である。

中でも《見えざる輸出》であるインバウンド観光は、3本柱のひとつとして「日本で消費：日本に呼び込んで大きく消費を促す」と掲げられており、産業界や地方自治体と一緒に、オール・ジャパンの外客誘致作戦が展開されることを期待したい。

引用参考文献

クール・ジャパン

大坪寛子他「調査結果に見る『ここがヘンだよ日本人』の視聴者像と番組視聴効果」、慶應義塾大学『メディア・コミュニケーション』[研究所紀要] No.53, 2003
国広陽子「現代日本のジェンダー変容と『ここがヘンだよ日本人』」、慶應義塾大学『メディア・コミュニケーション』[研究所紀要] No.53, 2003
鴻上尚史『クール・ジャパン？ 外国人が見たニッポン』 講談社現代新書、2015
堤和彦『「COOL JAPAN」かっこいいニッポン再発見』 NHK出版、2013

TBS事業局メディア事業センター『目覚めろ日本人!! これがヘンだよ日本人』河出書房新社、2002

萩原滋『『ここがヘンだよ日本人』：分析枠組みと番組の特質』、慶應義塾大学『メディア・コミュニケーション』[研究所紀要] No.53, 2003

三原龍太郎『クール・ジャパンはなぜ嫌われるのか』中公新書クラレ、2014

幕末・明治のクール・ジャパン

オリファント、ローレンス著、岡田章雄訳『エルギン卿遣日使節録』(新異国叢書9) 雄松堂出版、1978

チェンバレン、B.H.著、高梨健吉訳『日本事物誌(上下)』東洋文庫、1969

ハリス、タウンゼント著、坂田精一訳『日本滞在記(上下)』岩波文庫、1953～1954

ヒュースケン著、青木枝朗訳『日本日記』岩波文庫、1989
渡辺京二『逝きし世の面影』葦書房、1998

南蛮人の見たクール・ジャパン

石井昭夫『イエズス会宣教師の渡来から鎖国まで』(HP 「石井昭夫の観光研究室」)
<http://www7b.biglobe.ne.jp/~akil41/>(2016年6月)

ヴァリニヤーノ著、松田毅一訳『日本巡察記』東洋文庫、1973

岡田章雄『キリストンの世紀』(図説日本の歴史⑩)集英社、1975

ジャネイラ、A.M.著、松尾多希子訳『南蛮文化渡来記：日本に与えたボルトガルの衝撃』サイマル出版会、1971

フロイス、ルイス著、岡田章雄訳注『ヨーロッパ文化と日本文化』岩波文庫、1991

松田毅一・E.ヨリッセン『フロイスの日本覚書』中公新書、1983

ロドリゲス、ジョアン『日本教会史』岩波書店、1967

その他

岩生成一他編『外国人の見た日本』全5巻、筑摩書房、1961～1962

竹内誠監修『外国人の見た近世日本：日本人再発見』角川学芸出版、2009

富田仁編『事典外国人の見た日本』日外アソシエーツ、1992

の特質」ほか4本の論文で構成されており、萩原論文は、当初のコンセプトが回を重ねるうちにネタ切れもあって、徐々に変質していった経過を跡付けている。3年半続いた番組の後半は、日本文化批判とそれへの反論を主とする外国人対日本人のトークバトルの枠を超えて、ホットな国家間の政治・社会問題をとりあげたり、堕胎・不倫・同性愛、いじめや教育など、普遍的な問題にまで対象が広げられると、外国人どうしの激しいバトルも始まり、あまりの激しさに、「子供に見せたくない『アラエティ番組第6位』にランクされたこともあったという。

番組の評価 同じ特集で、東京および近郊の10大学の学生を対象に実施したアンケート結果の報告「『ここがヘンだよ日本人』の視聴者像と番組視聴効果」によれば、この番組を一度も見たことがないという人は12.3%、見た人の番組に対する評価は「面白いので再開してほしい」が12.2%、「まあ面白かったので再開してもよい」39.9%、「それほどつまらなくはないが、再開する必要はない」37.8%、「つまらない番組なのでもう見たくない」が10.0%という結果であった。内容に触れる余裕はないが、番組で話題となったテーマについての賛同の度合いを視聴者の属性別に5段階評価するなど様々な角度から分析が行われている。同じ特集でジェンダーの視点から論じた国広陽子は、日本人だけの討論では期待できない多様で活発な議論を盛り上げたところに、番組の真骨頂があったと評価している。

また、主要出席者の一人ベナン共和国のゾマモン・ルフィンは、こんな番組は日本でしか成り立たないと断言する。理由は、どの国にもヘンなところはいくらでもあり、そのヘンなところを外国人に批判などされたくない。ヨーロッパの国なら、植民地支配とか奴隸貿易の歴史やその後遺症が大きな問題になるが、そんなことはやった側は触れ

たくないし、やられた方はそもそも言えない。もし、アメリカのヘンなところを自由に指摘したら爆発するという。彼の言葉の一部を引用すると；

などとえば人種差別とか、あるいは政治問題、あとは犯罪が多くて危険であるとかいろいろある問題について、アメリカでは外国人にマイクを与えるまでの知恵はないよ。…だから私が言いたいのはこの番組を考えた人々は、日本国民に対して、世界の平和に対して、すばらしい貢献をしてきたわけ。あの番組が日本におけるさまざまな問題を解決してきたわけではない、でも考えさせる機会になった。その機会ができたから、日本は全世界の平和のために、とくに途上国の問題についてもっと意識を持っていかなければならないという気持ちが強くなってきて、愛の手をさしのべようという日本人の数がどんどんふえてきたわけ（『目覚めろ日本人!! ここがヘンだよ日本人』）。

ゾマモンは、外国人に自分たちのヘンなところを批判されても構わないという感覚、それをテレビ番組で実現する日本人を、今風にいえば、「クール」と評したのであった。

クール・ジャパンの成功

「ここがヘンだよ…」が終って4年後の2006年4月、今度はNHK衛星放送の「COOL JAPAN：発掘！かっこいいニッポン」が始まった。こちらは10年を超える長寿番組で、現在も続いている。番組プロデューサーの堤和彦によると、「2000年代半ばから日本のアニメやマンガやゲームなどのポップカルチャーが海外で評判を呼び、その褒め言葉がクール（かっこいい）だった。耳慣れない言葉ながら、その言葉によって外国人が日本文化に強い興味を抱いていることに注目してこの番組

を企画した」とのこと。失われた10年と言われる厳しい時代、リストラ、いじめ、引きこもりなど悲しいニュースが続く中で、閉そく状態を開拓するヒントが「日本を見つめている外国人の言葉の中にあるかもしれない」とも考えたという。

番組は在日外国人たちにテーマに即した場所に事前に出向いて体験してもらい、その紹介ビデオなどをもとに体験者を含む外国人8人が自国や外国と対比して、クールだ、ノットクールだ、などと議論して判定する。「ヘンなところ」を批判的にあげつらうのではなく、クールな（かっこいい）ところを発掘するという逆の行き方であり、これが長寿番組となり得た理由であろう。

番組はこれまで実に多様なテーマをとりあげてきた。堤によれば、当初はとりあげるべきテーマとして、①アニメ、マンガ、ゲーム、ファンション、Jポップなどのポップカルチャー、②茶道、華道、浮世絵、日本庭園などの伝統文化、③新幹線、自動車、ロボットなどのハイテク技術、の3本柱を考えていたという。ところが、番組制作の過程で外国人の話を聞いているうちに、彼らがクールだというものはこれら3つのカテゴリーにとどまらず、はるかに広範囲に及んでいることがわかつってきた。日本で暮らすうちに、日本の家電や生活用品の質の高さ、日本式サービスの細やかな心遣い、日本人のモノを大切にする心や暮らし方の合理性に気付き、眞面目で正直で礼儀正しい日本人が好きになってくるという。おいしい食べ物がふんだんにあり、安全で安心して暮らせる日本は世界一暮らしやすい国だという声が聞こえてきた。かくして番組のテーマも、外国人がクールだというモノやコトにつられて次々に広がっていき、「夫婦」「お母さん」「友達」「恋人」などの家族や人間関係、「礼儀」「しぐさ」「コミュニケーション」などの行動様式、「もったいない」「キレイ好き」「睡眠」などの暮らし方、さらには「草食男子」「婚活」「女子」など、時代を象徴するするト

レンドにまでスポットを当てることになった。かくして番組のテーマは具体的なものから抽象的な生き方へと広がり、現代日本の日常生活万般に及んでいったというわけである。

堤和彦『COOL JAPAN』かっこいいニッポン再発見』は、8年間にとりあげた215項目のリストとともに、2009年10月の100回記念番組のためにまとめた「クールと判定されたベスト20」を挙げている。ベスト20の中身をみると、洗浄機付き便座、100円ショップ、食品サンプル、カプセルホテル、自動販売機、ICカード乗車券といった便利さ・効率性・快適さを追求したものが並ぶ一方で、お花見、盆踊り、紅葉狩り、富士登山、居酒屋、神前挙式など、日本人の習慣や日常的な行動に類するものも多数含まれている。中には第13位「大阪人の気質」、第18位「ニッカボッカ」など、なぜ選ばれたのか首をかしげるものもあった。司会を担当した鴻上尚史がこれらベスト20のそれぞれが選ばれた理由とともに、外国人の目を通して見られた日本人のクールあるいはノットクールの行動や考え方を、9章にわたって面白く解説している。鍋料理、ラブホテル、入社式、運動会、駅弁、時間を守る、エトセトラについて、外国人の多様な反応を紹介しているが、常識が次々に覆され、まことに発見と意外性に満ちている（鴻上尚史『クール・ジャパン？ 外国人が見たニッポン』）。

クール・ジャパンと国民性 「クール・ジャパン」というタイトルは1990年代のイギリスを風靡した「クール・ブリタニア」という呼称を転用したものだという。当時イギリスで誕生した先端的な音楽やファンション、それらを伝える格好いいメディアなど、若者に支持された文化を当時のトニー・ブレア新政権が国策として推奨し、「クール・ブリタニア」を標榜してイギリス文化を売り込んだ。しかし、「クール・ブリタニア」は英國